

第2回

書道監修・執筆 青山浩之

一本の線に表情が宿る ～漢字仮名交じりの書～

今回学ぶこと

書道では同じ文字でも、いろいろな書き方ができる。今回はそうした書の表現の第一歩である線や筆使いについて学ぶ。線の太さや強弱による表現の変化、墨の濃淡による表現の工夫。文字や言葉のイメージに合わせて、いろいろな線で書に表情を生み出す楽しさにチャレンジする。

学習前チェック！ 用語の意味を確認しておこう

線／筆使い／筆／穂／濃墨^{のうぼく}／淡墨^{たんぼく}

線と筆使い

同じ「花」という文字でも、太い線で書いた花、細い線で書いた花、薄い墨で書いた花ではそれぞれ違った感じがする。線によって書の表現が変化するからだ。いろいろな線を書くためには筆使いの基本を知る必要がある。

まず、線の書き始めを「起筆^{きひつ}」という。それに続く筆運びを「送筆^{そうひつ}」、最後に紙から筆を離すところを「収筆^{しゅうひつ}」という。太い線を書くときは、筆を少し寝かせて、穂全体を使って書く。細い線は、筆を立てて穂の先を使って書く。手だけで書こうとせず、しっかりと構えて腕全体で筆を運ぶようにする。線の違いは特に起筆がポイント。起筆の向きを変えることで、さまざまな線の表現をつかもう。



今回の書



細い線で書いた「寒」という字はいかにも寒そうな感じがするし、太い線で書いた「温」は温かい雰囲気の本になる。線の太さを変えるだけでも、書のイメージが変えられる。



淡墨を使うと、線の太さや形がほとんど同じでも、また違った書の表現になる。墨の濃淡によって、同じ線でも違う表現を生み出すことができる。

今回の課題

- ① 太い線や細い線を使って、いろいろなイメージの「花」を書いてみよう！

墨の濃淡

墨の濃淡も、線の表情の違いにつながる大切な要素だ。

淡墨（薄い墨）を作るには、まず硯の陸（おか）でしっかり濃くなるまで墨を磨り、その後、海に入れた水と濃さを調整しながら混ぜ合わせていく。少しずつ混ぜながら紙に試し書きして濃さを確かめるようにしよう。

今回の課題

② 線の表現や墨の濃淡を工夫して、自分なりの「生きる」を書いてみよう！

いろいろな筆

書道の筆は、漢字文化に伴って中国から渡ってきた。現存する日本最古の筆は「天平筆」といって、お経などの小さな文字を書きやすいように、穂が短く、先が細くなっている。現在の筆も、用途に合わせてさまざまな筆が作られている。

筆の穂は「鋒（ほう）」とも呼ばれる。さらに細かく、先端から「穂先」「のど」「腹」「腰」と呼ばれる。持つ部分は「筆管（ひっかん）」という。

筆は、毛の長さによって「短鋒」「中鋒」「長鋒」、また毛の硬さによって「剛毫（剛毛）（こうごう）」「柔毫（柔毛）（じゅうごう）」「兼毫（兼毛）（けんごう）」（柔毛と剛毛を混ぜ合わせた筆）に分けられる。毛の長さや硬さによって線の表現も大きく変わる。短鋒や剛毫に比べると、長鋒や柔毫はコントロールが難しい。こうした筆の種類や特徴を知って、使いこなしていこう。

達人からひとこと！

線の表現や墨の濃淡を工夫して、普段書いている言葉や詩を表現する「漢字仮名交じりの書」に挑戦してみよう。同じ「生きる」という言葉を書いても、太い濃墨の線で表現すると力強く、細い線で表現すると快活な感じを受けたりする。淡墨でゆったり書いた「生きる」からはほのぼのとした自由さを感じることもある。線や表現を変えるだけで同じ言葉でも見え方が変わってくる。書には言葉や文字の意味、イメージをふくらませてくれる面白さがある。一本の線にさまざまな表情が宿る。さあ、自分らしく、個性あふれる書を表現する第一歩を踏みだそう。



達人

青山浩文